

橋合戦の伝承構造

——渡辺党と軍語り

(一)

平家物語における頼政・以仁王の挙兵から敗北にいたる物語りが、「頼政一党の最期を基層としてそこに悪僧たちの伝承や渡河戦の伝承を織りこみながら成り立っている重層的な伝承」^①であることを、先回、本誌上で論じた。そこで、本稿は、そのような視点に立ちながら、頼政挙兵伝承において重要な役割を果たしたと思われる渡辺党の存在に注目しつつ、この伝承に看取される深層の構造に論及することを目的とする。

まず、頼政挙兵の因として平家物語が示す宗盛と頼政子息仲綱との馬争いに関連して、多くの平家物語諸本が語る重盛と仲綱との「逸話」に注意してみたい。この話は、頼政・以仁王の挙兵という重大時を引き起こした愚人宗盛のふるまいと対比するかたちで、重

谷 口 広 之

盛の生前の人徳を賛美するという設定において語られる。すなわち、ある日、御所へ参内した重盛が中宮と対面中、重盛の衣服にくちなわ(蛇)がまとわりついた。重盛は周囲を騒がせないようにという配慮から冷静に仲綱を呼び出し、重盛からこれを受け取った仲綱、さらには仲綱からこれを受け取った仲綱配下の競も重盛に劣らず落ち着いてくちなわを処置したという話である。大筋において、この話は平家物語諸本間でほぼ一致をみるが、おおよそ二つの点で違いがみられる。まず、覚一本などの語り系諸本が、重盛から蛇を受け取る人物を競とするのに対して、延慶本、長門本、盛衰記などの増補系諸本はこれを同じ渡辺党の省であるとす点である。このことについて水原一氏は

これらを考え合わせるに、蛇を捨てた仲綱の郎等は競よりも省の方が正しくまた原形と考えるべきであり、また文芸の意味に於いては省でも誰

でも差はない事だったのである。^②

として、本来は省の担っていた役割がいつしか競にとつてかわった結果であると推定する。氏のそのような推定の根拠は、この「逸話」の前後関係、つまり宗盛と仲綱との馬争い、そして競による報復談とこの「逸話」の相互連関にある。すなわち

もともとは、「木の下の話」「蛇の話」「競の話」という別々の話題が、仲綱と馬を共通項とすることで連結し、この痛快な報復談となつたもので、蛇を捨てる端役は誰でもよいのである。多分「省の次郎」とするのが古形であつて、語りもの系では説話の連結性を強調するために、この端役を競に置きかえたのである。重盛が仲綱に贈つたのも底本（百二十句本「筆者注」）や広本系では馬と太刃である。これも他本は太刃が除かれて、全体を馬の物語として印象づけるようになっていく。^③

というものである。このような把握は氏の平家物語と「説話」に関する次のようなパースペクティブにもとづくものであると考へることができらるだろう。

延慶本・長門本・盛衰記等のもつ資料蒐集の態度が、語り本の文芸的統一性に対し、先行し影響したと見なされる実例の中に、或る種の文芸的現象の汲み取れるものがある事^④

すなわち、「本来個々の説話の蒐集段階にはない事で、関係説話が文芸的意図を以て連結される時に、本来一方の説話のみの登場人物である彼らが、連結する他方の説話中の些末的役割を兼ね両説話の連結環の役割をつとめるという事である」という見解である。^⑤ つま

り、本来別個の説話が平家物語のなかで関連づけられていくときに、それぞれの説話を繋ぐ役割が一人の人物に課せられ、この場合は、競がその役割を担っているという理解である。氏の指摘にあるように、競は、宗盛に馬を奪われ恥辱をうけた主仲綱の遺恨を晴らすために、わざと都にとどまり、まんまと宗盛を欺いて逆に馬を奪い、宗盛を辱める活躍をする人物であり、そのゆえに、「蛇の話」におけるその役割が省から競に移ったとしてもけつしておかしくはない人物である。また語り系諸本が「全体を馬の物語として印象づけるようになっていく」という氏の指摘も妥当なものである。そのような傾向は、たとえば一の谷合戦においてもうかがえる語り系諸本の特徴であるからである。^⑥したがって、平家物語の諸本がそれぞれに編集されていく過程を想起すれば、水原氏が示す理解はその通時的把握においておそらく正しいといえるであろう。

次に第二の相違について考へてみたい。覚一本などが、この話の発端を

或時、小松殿参内の次に、中宮の御方へまいらせ給ひたりけるに
 というように設定するのに対して、増補系諸本は

或時小松内府内裏へ参給たりけり、夜陰に面道にて年来知給たりける女
 を引へて物語し給けるに（延慶本）

ある時内府内裏へ参られたりけるに、夜陰に清涼殿にて師のすけ殿を呼
 びいだし参らせて、御物がたりありけるに（長門本）

小松大臣中宮の御方へ、被申べき事有て被参たりけるが、仁寿殿に候はれて師典侍殿と申女房と暫し対面有けるに（盛衰記）

という設定において語り出す。この相違について富倉徳次郎氏は

この説話は、中宮の御所で、しかも中宮の御前にいる時、突如蛇が出てくることとなっているが、そこには何か不自然さが感じられると思う。この説話の成長過程を調査してみると、おもしろい事実が発見される。すなわち、延慶本などでは、小松内大臣が、ある時宮中に参内されて夜中面道で、長年馴染んでいた一女房と逢っておられた時に、突如蛇が小松内大臣に這い上がったことになっている。これならば、蛇が出て来ることはなんら不自然ではない。そう思うと、この説話は延慶本が古い形で、重盛をいよいよ儒教的な道義を持つ人物として理想化しようとする意図が、やがてこの説話をこの本文（米沢本「筆者注」）にあるように、御妹である中宮を訪ねたおりの話に作りかえられたと判定できるのである。^①

として、諸本間における異同、つまり相互の新旧関係をとらえようとする。おそらく富倉氏の指摘は基本的に正しいと思われる。寛一本では、重盛の召しに応じて、すぐさま仲綱が参上することになっているが、延慶本では「人や候と宣けれと人不参、時の大臣におはする間六位や候と被召ければ伊豆守仲綱六位にて候けるか参たり」とあって、こちらの形が本来のものであり、寛一本の形はその省筆であろうと考えられる。おそらく盛衰記は、両者の要素を合わせて編集しているのであろうし、また、「夜陰に清涼殿にて」という不

自然な長門本の設定を「仁寿殿に候はれて」という形に改編しているのであろうと思われる。

このように、重盛と仲綱、そして競にまつわる蛇の「逸話」について、諸本間の異同を以上の二点においてとらえることができるが、しかしながらあくまで、これらは平家物語の現存諸本間の異同ではないことは留意されなければならないはずである。ここでは水原氏や富倉氏に導かれて、相対的な諸本間の位置関係を、かりに結論で示したにすぎない。したがって、それらは平家物語テキストの表層における次元にとどまるものである。

そこで、頼政拳兵伝承の核をなすと思われる「橋合戦」に照準をあわせて、頼政拳兵伝承の伝承としてのアイデンティティに遡及しながら、その手続きを経たうえで、最後にもう一度、この重盛と仲綱、そして競にまつわる蛇の「逸話」に言及しようと思う。

(一)

そこで橋合戦について考究しようとする場合、まず橋合戦であること、すなわち橋の合戦であることの重要な意味がそこに隠されていることが看取されなければならないのではないだろうか。そもそもこの合戦が宇治橋の合戦であり、宇治という地がそれ自体都にあって境界的であり、かつ橋戦さであることがこの橋合戦の二重の境

界性を示していると思われる。橋が独自の伝承時空を形成していることは柳田国男の「橋姫」をはじめとしてしばしば説かれるところであるが、民俗としていえば、「峠・橋・渡場は前代交通上の要地でまた多く国境・村境でもあったから当然道祖神・塞・岐神など境の神が祭られる場所であった」^⑧。岩崎武夫氏は説経「さんせう大夫」に触れて次のようにいう。

橋は無縁の地のひとつであるが、往古からそこに神を祀り、橋姫明神などといって、境を守る守護神として崇敬してきた伝承がある。

その橋はどのようなものであれ、これを私的に所有することのできない公的な性格のある無主の地―無縁の地であることを原則的な特徴とする。そして無縁の地であるからこそ、この橋を溜り場のようなものとして、旅芸人や盲人や乞食非人といった定住地をもたない放浪者が集まってくる。^⑨

網野善彦氏も指摘するように、日本霊異記に「難波ノ江ヲ堀り開カシメテ船津ヲ造リ法ヲ説キ人ヲ化ス」とされた行基以来、多くの勧進聖たちは橋、渡し、津を修造造築したが、とりわけ橋は「境界性、『無縁』の場としての特質」をもつ「さまざまな伝説でいろどられた、聖なる場」^⑩であった。もちろん、このような橋に集まる無縁の徒が橋の戦さの語り手であったという管理者のレヴェルに問題を還元しようとするのではない。橋というトポスに軍語りが伝承としてどのような存在根拠をもつかどうかということを問おうとしているのである。

る。たとえば『兵範記』に次のような記事がある。

離宮祭致齋之間、死人乗車被渡宇治橋、来八日御輿奉渡有憚否、前例如何被尋問、宇治古老者申云、無先例、依准大路不存禁忌者、仍被渡橋^⑪

左府頼長の娘が急死しその遺骸を載せた車が宇治橋を渡ったが一週間後の五月八日に予定されている神祭に死穢に犯された橋を神輿が渡ってもよいかどうか問題となったのである。これに対する宇治の古老の解答は、大路に准ずるによって禁忌は存せずというのである。すなわち橋は神輿を渡す聖なる回路であると同時に、大路と同様つねに穢れを担った存在であるという両義性を有する場であることを示している。ただしここでいう両義的な場とは、「内と外、生と死、此岸と彼岸、文化と自然、定着と移動、農耕と荒廃、豊饒と滅亡といった多義的なイメージの重なる場」、あるいは「空間的に、『此方』と『彼方』の境い目であり、両義的な性格を帯びやすい場所」^⑫として中心に対する周縁がはらむ活性力に満ちた場、つねに中心を脅かし聖と俗が同居する場というよりも、不可視の見えざるトポスがはらむ境界性としてとらえたい。境界とは俗のさらなる俗のトポス、負のトポスであることによって聖への転換を媒介する仲保的なトポスであり、そのような方位性を保証するトポスである。

神々は、本来、不可視的である。それは、さまざまなベルソナにおいて、いろいろの形姿をもって顕現する。そのための仕掛けが仲保的な

△トボス▽である。それは基本的に△イヅへ▽にかある聖なる神の△トボス▽に向かう方位性において求められる△トボス▽である。それは△イニシへ▽における、始源的な、大いなるかの時の記憶のうちにある。それを甦らせ、再現する仕掛けとしての△トボス▽が、俗なる△トボス▽の△イヅク▽にかある。それがほかならぬ仲保的な△トボス▽である。それは地勢的な解説を許すとしても、むしろ△イヅへ▽と△コチラ▽を結び、媒介的、仲保的な見えざる回路を隠し籠めることに意味がある。

この神話学的なトボロジを橋合戦のコンテクストに置き換えるならば、橋と宇治とは境界であることを可視化する二重の徴しづけであり、そのような境界のトボスであることによって不断にモノを分出するトボスであると考えることができ。地勢的に岸と岸とを架橋する橋は、こちらからあちらへの隠された回路を秘めている。人と人ならざるモノとの出会いがそこに物語りとして生まれる。この場合、モノとはいうまでもなく宇治川畔に果てた武士たち、とりわけ以仁王や頼政一党の、死せる怨念としてのモノたちである。だから「怨霊は都から放逐された非業の死を遂げた者たちの頭れである。祭祀共同体のペースペクティヴにおける里に対する野山はその周縁的な位相において天皇制のペースペクティヴにおける都に対応している」とすれば、頼政一党のモノ性は宇治と橋という二重の境界性によって保証されているといえる。だから頼政一党がモノとして担

橋合戦の伝承構造

う「周縁的な位相」は、その対極に都と平氏一門を置き、それらを脅やかす存在としての「周縁的な位相」である。そこに橋の戦さの語りの、伝承としての根拠があるとしなければならぬ。

いったい平家物語における合戦はその多くが浜であり湖畔であり峠であり海上であるが、それらはいずれも日常的ならざる場における戦いである。そのことを、実際に合戦が行われた場所がそこであったからとか史実がそうであったからとかいうように、合理的に解釈してもなんら意味をなさない。実際にそこで合戦があったという事実とそこに軍語りを成りたせることとの間にはきわめて大きな懸隔がある。それらの合戦の場が、もともと日常的な空間でないばかりか、戦場と化すことによって死者に血塗られた一種まがましい意味性を帯びた空間に深まっていく。その深処から、いいかえればその境界的な時空から、橋の戦さの語りが浮上してくるといえるだろう。

そのような伝承の古層は現行の語り系諸本からはほとんどうかがえないが、延慶本や長門本などの増補系諸本にはその痕跡をみることができる。長門本では、自害した頼政・仲綱父子の頸を平等院の壁板を破って郎党たちが隠し、

人是を知らず、後日に血の流れ出たりけるを見て、かべをうちはなちて見ければ、死人の首ひとつあり、伊豆守なり、さてこそ自害の門とて今

にあり。

とし、延慶本では頼政の頸は郎党たちの手によって河畔の土中に埋められたとされる。白川静氏や井本英一氏が古代中国や古代イランにおける「異族の首を境界のところに埋め」る儀礼や「境界における磔刑の」儀礼を紹介されて、これを「見せしめであると同時にそれを見る者に境界の穢れに触れさせ」るためのものとし、境界を「穢れとエネルギーの場」^⑩としているのは興味深い。従者たちが主君の頸を土に埋め、いずれかに隠そうとするのは、直接的には武士としての恥辱をまぬがれるための行為であらうが、伝承としての古層に境界性を徴しづける行為として頸の埋葬をみてとることも可能であらうと思われる。

さて、本来は宇治橋付近で討たれたはずの以仁王が信連らを供に南都へ向かい、その途中光明山の鳥居前で討たれ、信連も腸を破って自害したとする延慶本には、宮と信連の死に場所を光明山の鳥居前の前のこととその死に様が無残であることとに伝承としての古層性を見いだすことができる。なぜなら、彼らの死がそのようなものであることによって彼らがモノへと転じていく方向をもつことを伝承が契機づけられたからである。鳥居前とはすなわち神前であり、「御前みまへ、谷口やぐち、宮前みやまへ」^⑪という禁忌の民俗語彙をもちだすまでもなく、神前は穢すべからざる聖域である。その禁忌空間が血穢、

死穢で犯されるとき、そこに死せるものは、より狂暴なモノとして発現せざるをえない。富倉徳次郎氏の調査によれば「高倉神社の西の部落を鳥居というが、もと光明山寺の鎮守社の鳥居があったところと称している。山麓には旧奈良街道が通っている。高倉神社は高倉宮以仁王を祀った神社、かたわらに、その墓がある。社前の高倉山阿弥陀寺は僧円輪が以仁王の仏事をいとなむために開基した寺といわれている」^⑫のであって、以仁王のモノとしての発現がどれほどに現地において恐れられたかを如実に示している。そこに宮最期の伝承性があるというべきであらう。だから、谷宏氏などによって指摘されている矢切りの但馬のあだ名なども、その英雄的奮戦ぶりを共感をもって支持した民衆に帰することのできるものではなく、その名によって喚び起こされるモノの名として考えることができる^⑬。西本祐子氏は諸軍記テキストにおける名のりを分析して、威圧や団結、武器として名のりなどに分類しているが、重要なのは、戦場における実際の武士の名のりとテキストとしての軍語りにおけるそれとを混同してはならないという点であらう。

より根本的には、秘された名を管理しているのが、ほかならぬ軍語りの語り手であるということである。その名は人の名であるかぎり、管理を必要としない。しかしその名は人の名であると同時に、 $\text{霊}\wedge\text{モノ}\vee$ の名であり、現在へとくりかえし反復して立ち現れる名なのである^⑭。

平家物語テキストにおいて名のり手はすなわち語り手である。語り手が名を喚び、語り手が名のり手となるのである。西本氏も例として引いているように、四国落する義経は平家怨霊によって舟路を悩まされるが、「義経記」や「幸若舞曲」において「弁慶が平家怨霊や竜神に入なのり」をあげる場面がある。平家怨霊がモノであるならば、それをなのりによって、鎮める弁慶もまたモノであり、そこに名のりの本質、すなわちモノによる言挙げの位相をみるることができるであろう。

(二)

橋合戦において次に注目したいのは頼政の輩下として活躍する渡辺党の存在である。授、省、唱などの一字名によって知られる彼らは頼政の忠実な郎党として平家物語にもしばしば登場するが、渡辺党は淀川河口辺に地盤をもつ武士団で、その祖渡辺綱の伝承によってもよく知られている一族である。網野善彦氏^⑧によれば、海民などの非農業民と密接なかかわりをもつ悪党的な武士団として中世史のなかに位置づけられているが、小林美和氏^⑨は主として中世説話集にうかがえる渡辺党に関連する諸説話を通して「渡辺党は弓箭の芸を以て表芸としており、それに関する幾多の伝承を管理していた」とし「中世渡辺家伝」ともいうべき渡辺家による「武芸伝承」を想定

する。と同時に「宇治橋合戦における渡辺党の活躍」に触れて、おおよそ次のように指摘する。

(1) 「合戦の前哨をなす競説話は、渡辺党内部に胚胎した伝承として捕捉していく必要がある」こと。

(2) 「宇治橋から敗走する頼政に最後まで随行したのは渡辺党の面々で、読み本系の平家物語は、この辺り特に詳しく、延慶本では、頼政が自害に際し源八（「山槐記」によれば源八は字で競の養子、源副のこと）に遺言を残し、唱に自らの頸を討つことを命じたが「唱はあまりの悲しさにそれを拒否し、自害の後、頸を討つことを述べ、その通りにした」としていること。

(3) （同様に）「長門本平家物語に独自に見られる省の最期譚なども、説話の生成基盤を考える上では興味深い素材である」こと。という三点である。小林氏が想定する渡辺党の「武勇伝承」についてはここでは論及しない。というよりも「古今著聞集」などにうかがえるそれら「武勇伝承」と平家物語テキストにおける渡辺党の伝承とは伝承としての位相を異にするものとみるべきである。なぜなら、小林氏が「著聞集が収録した、渡辺党関係の説話」について、『叡感のあまりに禄を給けるとなむ』、『誠にゆゆしかりける上手也』、『目おどろく事なりとなむ』といった結びの句がさし示すように、いずれもその弓矢の芸のすばらしさを称えたもの」とする

ように、氏のいう「武勇伝承」とは、渡辺党の武勇、武芸の勲しを伝えるものであって、その意味で軍語りとは伝承のありようを異にするものであるからである。これに対して小林氏の(2)、(3)の指摘は、延慶本、長門本の両本がそれぞれ頼政挙兵伝承の軍語りとしての古層を示している例として理解することができよう。それは(2)が主頼政の最期の言葉と最期のありさまを聞き見たものの伝承であること、(3)がすみやかに自害するためにわが子を欺いて最期を遂げた省の伝承であること、そのいずれもが主や親の最期を従者や子がみとるといふ軍語りの基本的ありようを示しているからである。非業の死の最期をみてとったものが、その最期を語る語り手であったことは俊寛有王の例をひくまでもなくモノ語り、すなわち軍語りの有する基本的構造である。

それでは渡辺党の伝承とはなにか。近藤喜博氏は渡辺党の伝承の背後に「水霊に仕へた巫女の」「呪術や唱導の世界」を想定する^⑧。

難波長柄の渡りにも、かうした女性による唱導的鎮靈者が存在し、早く長柄の橋姫信仰を形成して、水霊鎮祭の呪術や唱導の営みをつづけたのであったが彼らの流浪とともに唱導としても流伝運搬されたのは著例であった。渡辺の渡渉地点にもかうした零落した巫女群が(中略)たむろしておつたと考えられる。

難波の渡辺のこし方には、かかる呪術に伴って、鎮靈の唱導団が占居することになった。彼らはかつての御巫の流れのままに、女人による唱導

を主体に形成されたと思われることは、水霊奉仕の女人の唱導が渡辺党の上に、重要な役割を果たしていると思われ(後略)

おそらくこのような指摘は、先述した渡辺党と海民などの非農業民とのつながりをいう網野氏の見解とも接点をもつことになるだろうが、そのような観点からみた場合、平家物語剣巻の伝承はきわめて興味深い。

ある公卿の娘が嫉妬心から「生きながら鬼にな」ることを貴船明神に祈り、明神の示現によって三七日宇治川の水に浸り遂に望み通り鬼、宇治の橋姫となって「妬しと思ふ女、其ゆかり、我を男の親類、境界、上下をも選ばず、男女をも嫌わず、思ふ様にぞ取り失ふ」ようになる。ある日源頼光の四天王の一人渡辺綱は、夜、主の使いに出了たところ若く美しい女に変じた鬼に「一条堀川の尻橋」で出会い、「我等は五条渡に侍り送り給なんや」と言われるままに馬に乗せたところにわかに鬼となって綱をつかみ空中高く舞い上がる。綱は太刀で鬼の手を切り難をのがれるが、後日、摂津の渡辺から母が訪れ鬼から奪った手を見せてほしいと頼まれる。綱が鬼の手を見せると「是は吾手なれば取るぞよといふままに恐ろしげな鬼にな」って虚空に消えうせてしまったという伝承である。同様の伝承は「太平記」にも「御伽草子」にもうかがえるが、近藤氏は、

水霊への畏怖に於て、古代世界の難波の水霊はその占める地位は決して

軽視するべきものではなく、この鎮靈において長柄の人柱は、諸方に流布することとなつたやうに思はれるが、その伝説流布に一中心であつた長柄の橋は、大江と共に渡辺をふくむ難波の渡りの中にある。それだから渡辺渡をふくめてかうした地点の水霊に仕えた女性と、その畏怖すべき水霊の妖怪変化とは、長い間の推移の上に合縁して、平家剣巻の話へと成長発展していくべきものを孕んでをつた。

と伝承の経緯をあとづける。その妥当性の範囲はともかく、平家剣巻などにうかがえる渡辺党の伝承には、少なくとも水辺と橋と渡辺党というつながりが浮かび上がってくる。そのことを重視したいのは、橋合戦が橋の戦さの軍語りであり、渡辺党の軍語りであるというその古層性をそこに見出すことができるからである。

ここまでできてようやく、本稿の当初の目的であつた、重盛、仲綱、そして競にまつわる蛇の「逸話」がなぜ成り立ったのかについて、推察することが可能になつた。三たび近藤氏の言を借りるならば、「水霊としてのこれらのミズチ、或は蛇」にかかわつて、伝承世界における渡辺党のありようの投影が、じつはこの説話を育んだのではないだろうか。そのような観点から次の説話は注目されるべきものである。

渡辺に往年の堂あり。薬師堂とぞいふなる。源三左衛門かけるが先祖の氏寺也。つがふの馬允が時、この堂を修理しけるに、もとこけらぶぎにてありけるが、年久しくなりて、みな朽ちくさりて侍けるを、葺かへんとて、うへをとりやぶりて侍けるに、大きなるくちなはありけり。なに

橋合戦の伝承構造

とかしたりけん、おほきなる釘にうちつけられて、とし比はたらきもせて、かくてありける也。其時、この堂の建立の年紀をかぞふれば、六十余年になりけり。其あいだかくうちつけられながら、いきてありける命ながさ、おそろしき事也。その蛇のありけるしたのうらいは、あぶらみがきなどをしたるやうにて、きらめきたりけり。いかなる故にかおぼつかなし。これはまさしく、かけるがかたりけるなり。

〔古今著聞集〕巻第二十魚蟲禽獸第三十、六九五、渡辺の薬師堂にして大蛇釘付られて六十余年生きたる事〕

小林氏は「これは、渡辺の家内部の話を伝えるという点で、まさしく家系伝承の典型のような説話である」とし、特に末尾の「これはまさしく、かけるがかたりけるなり」に注目して「語り手即伝承者としての翔の姿」をそこに見出そうとする。それはそれとして、より興味をひくのは、この堂が渡辺家の氏寺であり、その天井裏に釘づけにされたまま六十年にわたつて生きながらえていた蛇の存在である。著聞集はこの説話を「おそろしき事也」「いかなる故にかおぼつかなし」と怪異のレヴェルにおいて編集しているが、渡辺党と蛇とのかわりを抜きにしては成りたない説話であろうと思われる。渡辺党がその拠点とする地域における、蛇を具体的表象とする信仰形態については近藤氏の詳細な研究が既に明らかにしているというのである。

その意味では、重盛から仲綱を経て蛇を手渡された人物は、水原氏のいうように「誰でも差はない事だったのである」が、無条件に

誰でもよかつたわけではない。平家物語諸本間において、それが省から競へと移動したのは確かであろうが、省であっても競であっても彼らが渡辺党の一員であったことが重要なのである。

平家物語の編集のレヴェルにおいてはこの話は重盛と宗盛との賢愚の差を示すために位置づけられている。そのことはこの話を前後の文脈に意味づける冒頭と末尾の編集句が明確に示している。

(冒頭) これにつけても、天下の人、小松のおとどの御事をぞしのび申ける

(末尾) 小松のおとはかうこそゆゆしうおはせしに、宗盛卿はさこそなからめ、あまつさへ人のおしむ馬こひとつて、天下の大事に及ぬることうたてけれ (寛一本)

(冒頭) 是に付ても小松殿の御事を慕申さぬ人は無りけり

(末尾) 誠に難有かりける小松殿の御心はへ哉哀れ御命の長らへて世の政を助けましまさんにはいかに世間も穏やかに国土も静ならましと万人惜奉ると云とも甲斐なし (延慶本)

とあって、いずれもこの話を編集する意図を明瞭に指し示している。もちろんだからといって、この話が付加説話であるとか傍系説話であるとかを指摘しようとするのではない。そのような編集句によって縁どられ、そして諸本間においていくつかの改編を経ながらも、基本的にこの話が蛇というモチーフにかかわって、渡辺党と密接な関係をもつものであることを考察したのである。

注

- ① 拙稿「頼政拳兵伝承の構造―その軍語りをめぐって―」『同志社国文学』二十六号、昭和六十一年三月。
- ② 水原一氏「平家物語における説話の蒐集と統一の問題」『駒沢国文学』一、昭和三十四年十一月。
- ③ 水原一氏校注『新潮日本古典集成 平家物語上』頭注、三二五頁、新潮社、昭和五十四年四月。
- ④ ②に同じ。
- ⑤ ②に同じ。
- ⑥ 拙稿「軍語りと証言」駒木敏氏編『神話・神謡・物語り―伝承と儀礼』桜楓社、昭和六十二年三月。
- ⑦ 富倉徳次郎氏『平家物語全注釈上』五七五頁、角川書店、昭和四十一年五月。
- ⑧ 竹田聰洲氏「神の表象と祭場」『日本民俗学大系8』一七九頁、平凡社、昭和三十四年。
- ⑨ 岩崎武夫氏「説経『さんせう大夫』と境界性―直井の浦、人売り譚考―」『文学』岩波書店、昭和五十二年八月号。
- ⑩ 網野善彦氏「無縁・公界・楽―日本中世の自由と平和」一六五―一六七頁、平凡社、昭和五十三年六月。
- ⑪ 『兵範記』仁平二年四月二十八日条。
なおこの資料とその意義については西垣晴次氏「民衆の精神生活―穢と路―」『歴史公論』昭和五十九年四月号に教えられた。
- ⑫ 山口昌男氏『文化と両義性』八一頁、岩波書店、昭和五十五年四月。
- ⑬ 廣川勝美氏「テキストのパスベクティヴ」廣川勝美氏編『伝承の神話学―アイデンティティのトポロジー』三五頁、人文書院、昭和五十九年十月。

- ⑭ 柳田洋一郎氏「遊行のトボロジ」廣川勝美氏編『伝承の神話学—アイデンティティのトボロジ—』一二二頁、人文書院、昭和五十九年十月。
- ⑮ ⑥に同じ。
- ⑯ 白川静氏『漢字』（岩波新書）、『漢字の世界』（東洋文庫）、『漢字百話』（中公新書）など。
- ⑰ 井本英一氏『境界・祭祀空間』二一・二三頁、平河出版社、昭和六十年九月。
- ⑱ 民俗学研究所編『総合日本民俗語彙』一三三九頁、平凡社、昭和三十年六月。
- ⑲ ⑰に同じ、六三一頁。
- ⑳ ①に同じ。
- ㉑ 西本祐子氏「軍記物における△なのり▽の考察」『大谷女子大国文学』十二号。
- ㉒ 拙稿「軍語りの様式と構造」『日本文学』、昭和六十年四月号。
- ㉓ 網野善彦氏『日本の歴史10 蒙古襲来』小学館、昭和四十九年九月。
- ㉔ 小林美和氏「中世武勇伝承とその基層」『立命館文学』四三五、四三六号、昭和五十六年十月。
- ㉕ 近藤喜博氏「難波の渡辺党」(上)(中)(下)『国学院雑誌』昭和三十年五月・六・七月号。